

私の保育



川口 順子

「保育とは何て難しい仕事だろう。」それが率直な今の私の心境である。保育者になって十三年目。一年一年、これでいいのだろうかと自問しながら仕事をしてきたつもりだが、やればやるほど、分らない事が増え、難かしさが出てくる。子どもが見えない。発達とは。そのポイントをどう押えれば良いのか。指導のすじ道を立てるには。と、いつもまるごとの悩みを抱えながらやってきている。

幸い、園の職員集団の中に、同じ基盤に立って話し合ったりや研究ができる関係ができていることもあって、悩みは一人ではない。昨年度は、何年間か積み上げてきた実践を整理しようと、園全体で取り組み、年間指導計画を作成してみた。そして今年は、その計画を再度検討しながら、保育を、あらためて捉えなおす年になったのである。が、「プラン」と実践の間は、考えながら保育を進めようとすると、より複雑になってくる。プランがいく

らうまく組み立ててあっても、保育は、その日、その日の勝負なのである。「一日一日、良い保育をしよう。」それが今年度の課題になった。一体、何から学びなおそうか、とあせった気持ちで母校であるお茶の水女子大学の附属幼稚園に出かけて行った。

何年かぶりに訪れた附属幼稚園、変わらない環境。何となく「帰って来た」という気分で、堀合先生の保育を一日追ってみる。一人一人をおさえ、無駄のない先生の保育を見て、その一コマ一コマの動きの大切さがやっと分りかけてきた。やはり、良い保育を見る事が一番近道である。自由形態の中で、子どもに対応して動く指導の難かしさ。この事位、個人差の出る事はない。子どもの要求が分って、教師の意図をうまく融合させていく。計画を計算しながら、よりベターに達成させていく。まさに創造である。

十一月も末、私の受け持っている四十人の年少児（四

歳）もだいぶ個々の力を出して、友達とつながりを持ちながら遊びを進められるようになって来た。今の時期、何を育てる事が大切なのかを明らかにするために、遊びや友達とのつながり方、生活面での問題点や到達点などを、自由形態での状態をベースにしながらい出してみる。四歳時の二期期の目標として「思っていることを言葉で言い、自分を十分出しながら友達とかかわりを持って遊べるようになる」と指導計画にあるが、友達のかかわりは、こちらが意図的に達成させようとしないで、集団の楽しさを感じるようになっていく中で、けっこう方向が出て来ているのではないか。むしろ、個々の力をしっかり身につけさせることを今の目標としてすえていかなければいけない。年長児の実態からも洗いなおし、今の時期のポイントをそのように押えてみた。

例年だと、年少組も二期期末、クラスでまとまった活動に取り組めそうにみえ、年長の動きに誘発されて、ダンボールで大きな乗り物を作ったり、お家づくりをしている時期だが、視点を変えることで、活動の選択も変っ

てくる。そこで、幼児の要求として出ている友達とのかわりを持ちながら遊ぶ遊びの中で、個の力を見るように配慮し、運動あそびや、指先の作業を主とした製作などを自由あそびの中に入れて込んでいくようにしてみた。例えば運動あそびでは、半円形の一本線ドンを、毎日くりかえし、教師がついて組んでいった。この遊びの中で、ジャンケンの理解を確かにしたり、自分の前の子が負けたら、とっさに飛び出していこうとする瞬発力を育てたいと思った。

「先生 ドン、ジャンケンポイやろう。」という声が出てくるようになったころ、今まで自分の殻に入りこみがちだった数人の男児が、毎日入って来て、何十分も続けて、遊びを楽しむようになっていった。彼らは、園生活のスタートの時点で、それぞれとまどいの多かった子どもたちである。そのうちの一人、S男は、入園当初、ロッカーの中に入りこみ、他の子の遊びをながめていた。何をやるにも一歩ずつ他児より遅く、朝、ボサツとした顔で、登園して来て、遊びに入っていくまでにすませな

くてはならないうがいやタオルかけを、教師に指摘されながらようやくすませ、自分の遊びを見つけて入っていく頃には、回りは佳境に入っている、というような子であった。が、この遊びの中では、目を輝かせ、しだいに自分がジャンケンを早く判断できるようになるのを喜び、前の子の動きをとらえて動こうとするようになったのである。何よりも遊びへの持続力がこんなにあったのかと驚かされた。遊びでの姿と平行して、生活面でも自分からやろうとする力がみえるようになったのもこの頃であった。

十二月に入り、年長組が一台六人乗りの車づくりに取り組んで約半月がたった。木工での協同製作、クラスで一台、みんなで乗れるのりものを作ろうと、のこぎりやかなづちを使い作った車が出来上った。年長の子どもたちは、一人一人「やった」という顔で車を動かすはじめた。役割がでてきて、押すことのうまい子、ストップのかけ方のうまい子など、それぞれの持ち味を生かして、ごっこが始まった。「先生、乗ってるよ。ぼくたちにも乗

せてくれるかな。」「そうだね、明日、乗せてくれるかも知れないよ。そうだ、お金入れるハンドバッグ作っておこうか。」と提案する。「よし、この活動を利用してホッチキスをとめる力を見ておこう」と計画を組む。

さっそく、画用紙を半分折って回りをホッチキスで止めるだけの簡単なハンドバッグづくりが始まる。「先生、ホッチキスのはりがなくなつた」「リボンどこ」「ことめて、できない」と作業が進む。「ハイ、ハイ、まあってね」といいながら動き回る。このような活動では、前日、子どもの動きを予想して、あらかじめ環境設定しておくことが、成功のポイントになる。ホッチキスはハリが入ってすぐ使えるか、何人が一度に使えるように用意しておけば良いか、リボンは使いやすい長さに切つてあるか、サインペンやマジックの数は、穴をあけるパンチの数は、と使うものを整え、作業しやすい機の体型を組んでおく。ところが、なかなか予測通りにいかないことが多いのだが、環境設定の重要さもあらためて感じてゐる今日この頃である。

そんな具合にハンドバッグが出来て、いよいよ乗りものごっこが始まる。ウルトラマンごっこをやっていた男児も、ままごとをしていた女児も「あ、動いてるよ」と園庭にとび出して行く。年長組の子ども達が役割について、遊びのしくみが動きだす。「銀行」のかんばんの中ににお金をくれる人がすわっている。巧技台の中にもぐつて中からキップを出す「自動券売機」の係。駅員たちも帽子をかぶり、それぞれの役割を意識して目を輝かせている。年少組の子たちは、案内係のお姉さんに手をひかれて待望の電車にのれるわけだ。ところが、たのしそりで、どの子どもとびつきそうなどっこの中に入つて行かない子が、何人か室の中にこっている。乗りものごっこ一日目の帰り、「今日、電車にのつてきたよ。楽しかったよ。」と話す中でも、自分は自分、という顔。「明日乗つてみようか」と声をかけてもうかぬ顔。次の日、その中の一人、N子をさそつて、「いっしょに乗つて来ようか。」と手をつなぐ。「ね、Nちゃん、ここ銀行なんだつて、お金ちょうだいって言つてみるからね」と私の方か

ら必要な言葉を言い、彼女と行動をとってみる。

私もハンドバッグをかけ、頭に紙のヘアーバンドをして気分を出す。二回ほど、それを繰り返し、彼女はホツとしたような顔で室に入っていった。なるほど、ごっこに必要な言葉、「これ下さい」と言うことや、キップを切ってもらうなど遊びの順序を通過する事が、今の時期の年少の子にとって、けっこう難かしい課題なのだという事があらためてわかった。次の日、N子は、いつにもなく明るい顔でやって来た。「先生、今日もいっしょに乗ろう、私、先生がいっしょじゃなきゃいやだもん、ねー」。彼女が私にこんなに強く、明るく自分の要求を出してくるのは始めてだった。前日、彼女にベターっと付いて動いた事が彼女を開かせたのだ。三人兄弟の一番上で母親も若く、口数も少ない。狭い家の中に姑をかかえ、彼女は「外へいって遊んどいて」と、いつも一人で行動することになる。何となくさみしげな彼女が、教師のこんな小さな働きかけて積極性をみせた。そして、その日は、「Nちゃん、先生の分もキップもらって」と、彼女

に必要な言葉を言わせながら、一回、いっしょに乗って来た。その後、彼女は、同じようなタイプのK子をささって、一日中、乗りものごっこに参加していた。

行きつく先は、やはり、一人一人の子ともだ。四〇人、一人一人がいつも、教師に様々な思いで、要求を持っていて。子どもを見つめ、子どもの中から、今教師としてどう動くことが必要かを見つけだす。教師が指導しようとする方向を向いて引っぱらなくても、子どもは必ず教師に方向を示してくれるものだ。一人一人の成長が保証できるような教育をしたい。いや、しなくてはならない。一日のうちの一コマ、必ずつかんでやる必要のある子、年間のある時期、集中的に見てやる必要のある子、と、それぞれだ。あの子は、あの時、見すえたこととどう違って来ている、とどの子にも思える、そんな教師でありたいと思う。

(世田谷区立八幡山幼稚園)